3月5日(日)

特大サイズで脂がノリノリの

赤魚のみりん干し

1パック **680円**（税込）

まずは卒業生の方、ご卒業おめでとうございます。

今年も当店に来られた皆様から「家のが卒業したから、良いの頂戴！」と沢山の声と、少し哀愁の漂うような笑顔で声をかけて頂きました。

この時期になると数年前、娘達が制服を着てお店の前を通り、友達と一緒に手を振って通っていたのを思い出し哀愁を独り漂わせて…あれ？…目から汗が……(笑)。

話が脱線しましたが、赤魚みりん！昨日、作業をしている私の後ろからソロリ、ソロリと近づいてきて「赤魚みりん干しの特大サイズ入るんよね～、赤魚みりん食べたことある人おる？」と店長が呟いてきました。

赤魚みりんは、私の大好物！息をするかのように、自然とその魅力を語ってしまう私……あれ？そうです、ニヤリと笑う店長の顔で感の良い私は、すぐに気づいてしまいました。(これ、コメントの振りじゃん！)

解りました、語りましょう！あの私の好物、赤魚みりんが、さらにパワーアップした特大バージョン！焼いたら無限に染み出てくる旨味の脂とそれを逃がすまいと、コーティングされた程よい甘味のみりんのコラボ。焼きたての皿に盛られた赤魚に箸を立てると、ホロホロと崩れ湯気をたて、いい匂いが食欲を刺激し、我慢できなくてご飯を頬張る…無限ループの作業で胃袋が満たされていく幸せ感！もっと語りたいのですが長くなりそうなので(汗)。

私も、子供達が離れていき寂しさを感じていますが、美味しい魚を送ってあげると、美味しかったよーと、食事風景の写真を送ってきてくれたりします。離れて暮らしてるからこそ、有り難みを感じてくれているみたいです。

今年から就職や進学する皆さんの中で、人暮らし等、地元を離れる方もいらっしゃると思いますが、私たち親にとっては、皆さんの健康と幸せが一番の有り難みです。忙しいとは思いますが、帰れるときには親に顔見せに帰ってあげてくださいね。

西田鮮魚店　主任　奥原　歩久斗

ジョイフル **西田鮮魚店** ☎72-5246

御用聞き便専用番号 ☎090-7125-5489（旧庄原市内はご自宅に配達）

御用聞き便ポイントカード 火・水曜日ポイント2倍

『中国山地のへそとモンベル』

鮮コーポレーション㈱　代表取締役会長　西田　昌史

「モンベル知っとる？」
「アウトドアの？」
「うん」
「知っとる。」
用件がすんで切ろうとした携帯電話から彼の声は続く。
「庄原にどうじゃろ」
「うん？」
一瞬、とまどったものの私の口からでたのは、
「え～のう」

ジョイフルの未来を考えることは、庄原の未来を考えることにほかならない。
逆もまたしかり。
庄原の未来を考えることは、ジョイフルの未来を考えることにほかならない。

3日後、彼が2冊の資料を持って来てくれた。
帝釈の雄橋が表紙になっている『庄原ＤＭＯ』発行の『庄原市観光ガイドブックＳＨＯＢＡＲＡ』と、『中国山地　比婆道後帝釈国定公園ガイドブック　山たび』。
彼は言った。「庄原には何にもないかもしれんが山がある。」確かに。
この2冊のガイドブックを見るまでもなく、いや、改めて見直すと、庄原には、これからの時代の宝物がワクワクするほどいっぱいある。
なにしろ、庄原は中国山地のへそだ。
比婆山・吾妻山・道後山・帝釈、県民の森。
東城、西城、比和、高野、口和、総領。
極めつきは国営備北陵公園。なんと贅沢なことか。

彼は『庄原をアウトドアのメッカに』と題してＡ４の紙に要点をまとめてくれていた。
その中で、一番のおすすめは、やっぱり今、ブーム到来のオートキャンプだろう。庄原にも何カ所もある。予約がとれないほどだと言っていた。ＴＳＳの『西村キャンプ場』などという番組が作られるんだから。視聴率も良いらしいし。
山ガールと呼ばれる女性たちがいる。ジョイフルの小森館長もその一人。休みの日には、一人で、その辺の山を歩く。それに飽き足らず、県外にも足を伸ばすことがあるようだ。四国の石鎚山に、『モンベル』の店があったと教えてくれた。
ハイキング・トレッキング・トレイルラン・スカイランニング・マウントバイク。要するに、山を歩いたり走ったりして楽しもうという人たちがたくさんいるということだ。
川遊びもできる。もちろん釣りが一番だが、西城川ならカヌー、カヤックだって、場所を選べばラフティングさえできるのではないか。
地味なところでは、バードウォッチング・植物観測・天体観測なども。
去年の12月、広島から来た友人が、我が家で晩ご飯を食べ、『ラフォーレ』（つい『かんぽ』と言ってしまう）に帰るとき、夜空を見上げ、「星が近いねぇ」とか言って感動していた。こっちがビックリした。「ふつうじゃろ」。そう言えば、私も高校時代、高野の友人の家に泊まりに行ったとき、満天の星だと感動して、驚かれたことがあった。
住んでいる自分たちは当り前でも、よそから来た人は驚くことがあると、よく聞くが、ほんとにそう。庄原は、自然豊かなんだ。10分行けば、そこは山。そこは川。それが庄原だ。そんな庄原に『モンベル』を持ってきて、そこをアウトドアの基地にする。すばらしい。
さらに「へぇ～」と思ったのは、国営公園で、年一回、中国地方最大の『大キャンピングショー見本市』を開けばなお良い、という。「そこまで考えとるのか、へぇ～」である。

そして、彼が差し出したのが1月２８日の読売新聞。見出しが『アウトドアで地方元気に』。モンベルの辰野勇会長のインタビュー記事だ。
結論から言おう。「モンベルを庄原に」だ。
私は20年も前になるだろうか。経営セミナーで、辰野会長の講演を聞いたことがある。私より5才年上。訥々とした語り口もそうだが、話されることが経営者というより、山男。山の話ばかり。山が好きなんだなぁ。印象に残った。

辰野会長のインタビュー記事を引用してみる。
「この3年、地方への出店を加速してきたが、メリットは大きい。衣料が大半のアパレルとは違い、我々は場所をとるカヌーやテントも扱っている。アウトドアには必要な商品で、地方では広い店内でゆったりと選んでもらえる。
昨年春には人口２３００人の北海道南富良野町に道内最大級の店を出した。週末にはモンベルに小旅行するような気分で多くの人が来店してくれる。」

いいぞ、いいぞ。庄原にぴったりだ。さらに続く。

「地方では、屋外に出ればアウトドアのフィールドが広がっている。地元の人の熱意があれば人口が少ない場所でもやっていける。（中略）モンベルを誘致すれば交流人口が増えると期待されているし、何よりも地域の人が元気になる。引き合いは増えており、多くの人が耳にしたことがない場所にどんどん店を出していきたい。」

彼の慧眼に頭を下げるしかない。

モンベルの大山参道市場店

モンベルは近年、登山口の近くや川沿いなど、屋外でのアクティビティーを楽しめる場所への出店を進めてきた。その1号店となったのが鳥取県大山町だ。町の誘致で2008年に出店すると、自転車などで周辺を巡るルートを紹介するなど地域の振興にも貢献してきた。08年当時、大山町を訪れる観光客は71万人だったが、18～19年は100万人を超え、モンベルにとっても経営を支えるモデル作りにつながった。（2023年1月28日　読売新聞より）

２０２３年３月５日